

第1回日本組織適合性学会大会と その開催までを回顧して

柏木 登*

*北里大学医学部免疫学

1987年に Princeton と New York で行われた10th International Histocompatibility Workshopは、HLA研究にとり大きな曲がり角であった。第1に、HLAが免疫応答の制御において中枢的な位置を占めていることが明瞭となったこと、第2に、HLAの分子生物学的研究が進展して、リガントであると同時にレセプターとしても働く2面性が解明されたこと、第3に、HLAの解析にDNAレベルの方法論が導入可能となったことなどの当時の状況がその理由である。

その Workshop を準備していた1986年頃より、日本組織適合性研究会の討議の一部に、こうしたHLA研究の多様化への変化に応じて、研究会の今後の姿を抜本的に見直すべきではないかという意見が始めていた。そして、1987年春の研究会幹事会において“将来像ワークショップ”を設けることが合意され、幹事の赤座達也、秋山暢夫、柏木登、関口進、辻公美、吉田孝人の6名にその問題についての検討が委託された。

10th Workshop の Councillor Meeting は次回の Workshop を日本で開催することを決定し、その受け皿としても、日本組織適合性研究会はもう一回り大きな組織となるべき必要性が再認識された。研究会の発展的改組のモデルはアメリカにあった。アメリカでは、HLA Tray User's Meeting が American Society for Histocompatibility and Immunogenetics (ASHI) という学会組織に改まってから、当時すでに12年の歴史を経緯していた。この学会

は、研究の発表機関であると同時に、HLA技術者の育成活動にも力を注いでおり、International Workshopとは別の機能をもって HLA-ologyの発展に貢献していた。

1988年春の日本組織適合性研究会において、1973年の研究会発足以来15年間会長職を務めてこられた村上省三会長が引退され、相沢幹幹事が新会長に推挙された。このとき、学会組織への改組を念頭に置いた研究会再編委員会を設けることが議決され、委員に秋山暢夫、柏木登、笹月健彦、十字猛夫、関口進、辻公美、吉田孝人の各幹事が選ばれた。再編委員会は、再編後の組織のあるべき構成、運営、財政、学術集会、ワークショップ、学会誌、教育、対社会活動などについて討議を重ねるいっぽう、研究会幹事にアンケート調査を行って、これらの問題についての意見を収拾した。

1990年、11th Workshop の準備で多忙を極めていたさなか、秋の研究会における討議を通して、日本組織適合性研究会は1991年をめぐりに日本組織適合性学会に衣替えすべきだとの合意がなされた。そして、研究会再編委員会は名称を学会設立準備委員会に変更し、学会の会則作成の準備に入った。

1991年春に行われた研究会は日本組織適合性研究会の学術集会としては最後の集会となった。そして同時に、日本組織適合性学会が研究会総会の総意のもとで正式に発足したのである。このとき、学会の初代会長に相沢幹研究会会長が推挙され、学会事務局長には十字猛夫研究会事務局長が就任した。

学会の評議員を研究会幹事の全員で務めることが合意され、総会と学術集会をかねた日本組織適合性学会大会を年一回開くことが決められた。その第1回大会の会長には柏木登研究会幹事が指名された。

1991年は11th Workshopの年である。11月に横浜で行われたこのWorkshopは、HLA研究の時代性を反映して、討議のテーマが前回に比べますます多彩な様相を呈した。新しく発足した学会の会員全員の努力が質の高い成果をWorkshopから生み出すことに成功し、世界のHLA研究者より多くの賛辞が寄せられた。

第1回日本組織適合性学会大会は、こうした高揚したHLA研究の雰囲気のもとで、1992年の7月27日と28日の両日、東京市ヶ谷の私学会館で開催された。参加者は延べ300名を越え、活発な討論のために予定時間がしばしば引き延ばされて主催者をはらはらさせた。

11th Workshopに参加できなかった若い研究者や技術者のために、「11th IHWSのまとめ」と銘打つ報告講演が設けられた。報告は、(1) Serology, 赤座達也 (2) DNA typing, 木村彰方 (3) Anthropology, 脇坂明美 (4) Disease, 西村泰治 (5) Transplantation, 雨宮浩 (6) Epitope Analysis, 徳永勝士からなり、Workshopの主要テーマがすべてカバーされてその再現の役割を果たした。

学会の活力は学会員の裾野の広がりから生まれる。その考えに基づいて、新しい知見を伝えるための教育講演が用意された。(1) 日本におけるHLA研究の歴史、相沢幹 (2) HLAの構造および遺伝子、猪子英俊 (3) HLAタイピングの新技法・血清タイピング、内藤説也 (4) HLAタイピングの新技法・DNAタイピング、小幡文弥 (5) HLAと臓器移

植、P. I. Terasaki (6) HLAと疾患、片桐一 (7) 骨髄バンク設立の現況、十字猛夫 (8) HLA研究の将来、笹月健彦 からの講演の編成によって、主催者はその意図を伝えようとした。

一般演題は49題が口演され、そこにみられた特徴的なことは発表者にHLA技術者がおおく算えられたことであった。クラスI関連が8題、クラスII関連が20題、人類学関連が5題、疾患関連が7題、移植関連が9題という内容構成であったが、クラスII関連の演題数が物語る通り、諸種のDNAタイピングの手法の試みが披露されて、会員の興味はその難易度、再現性、適用範囲の比較に向けられた。

総会議事としては、4月に新評議員の互選によって選ばれていた学会理事9名と監事2名が承認されたことがある。理事は相沢幹、柏木登、片桐一、笹月健彦、十字猛夫、関口進、辻公美、内藤説也、吉田孝人の9名の評議員、また監事は秋山暢夫、野本亀久雄の各評議員である。また、第2回と第3回の大会会長に片桐一理事、吉田孝人理事がそれぞれ指名された。

かくして、日本組織適合性学会は第1回大会をほぼ成功裏に終了し、まずまずの滑り出しであった。しかしながら、その時点において、いくつかの事項が将来決められるべき課題として残されたままであった。第1は財政的基盤の安定化であり、第2はそれに基づく機関紙の整備である。第3回大会を迎えた現在、編集担当理事でもある吉田孝人大会長のご尽力により、この学会プロシーデングスがわが学会誌として刊行されることとなった。第1回大会とそれまでの経緯をまとめたこの拙稿が記録として残るのも、本プロシーデングスが発行されるに至ったお陰である。